2024（令和 6）年度　文学部国文学科　学校推薦型選抜（一般）講評

【出題のねらい】

　出題文は、日本漢文にみられる「和習」などを問題視した荻生徂徠や、仮名文なら自由に文が書けるとした本居宣長らの「言語に習熟すれば文章は自在に書ける」との意識を、そもそも書記言語と口頭言語は別物であり、前者は後者の干渉により変動する、という原理から批判したものである。漢字の読みや表記、基礎的な古典文法の知識および語意や慣用句の知識を問うとともに、こうしたやや難解な論理をきちんと読み取っているか、かつ自分自身の判断、見解をわかりやすく具体例や根拠を挙げながら文章に表現できるかを見た。

【採点のポイント】

問一

　論説文などに使われるやや難しい漢字熟語を正確に読めるか、書けるかを見た。

問二

　古文の助動詞の活用や意味について基本的な文法知識を見た。

問三

　しばしば使われるがその意味を言い換えにくいような語についてきちんと解答できるかを見た。

問四

　慣用句の知識を問うた。

問五

　まず書記言語の「破格」について「書記言語は口頭言語の干渉によって変動するという一つの原理」が背景にあると筆者が考えていることを指摘する必要がある。その上で「「和」という意識によって破格をくくり」「価値判断することの」問題点を指摘しているかどうかがポイントとなる。

問六

　「言語に習熟すれば文章は自在に書けるという観念」について、本文中で口頭言語と書記言語のずれについて言及していることをふまえ、また「自在に」とある部分を見逃さず、単に文章が書けるかどうかではなく、日常の言語に習熟すれば複雑な情報や思考、感情なども自在に文章化できる、という観念であることを理解しているかと、そういう観念に対する賛否の判断材料として適切な具体例や根拠を示しているか、を見た。論旨の明瞭さや誤字脱字の有無などにも留意した。

【講評】
問一
　カタカナ部分はほぼ書けていたが、「かんせい」を正しく読めたものは少なかった。何となく(意味が)わかればよしとするのではなく、正しい読み方を調べる習慣をつけて欲しい。
問二
　多くの人はほぼできていた。「助動詞の意味」で「次の語群の中から」「選んで」書けと指示しているのに、語群にない「適当」と解答している者がいた。問題文をよく読んで解答して欲しい。
問三
　多くはほぼ正しく意味を言い換えられていたが、「めちゃくちゃに」など意味のずれた解答もあった。
問四
　ほとんどが正答していた。
問五
　「文を綴る行為において、日常言語や地域言語の干渉によるなどして破格は常に起こること」や「書記言語が口頭言語の干渉によって変動するという原理」に言及している答案は多かった。ただしそれだけでは不十分で、さらに、日本語の干渉を受けて漢文の破格が起こることを全て「和」の意識でくくることの問題点を示すことができているかが評価の分かれ目となった。正確な文章読解力とともに読みとった内容を趣旨が明確になるように適切に記述する力を養って欲しい。
問六
　課題文をよく読めばポイントはわかるはずだが、この点を理解できていないまま書いていると思われる解答が半分ほどあり、大きく減点せざるを得なかった。まずは課題文をよく読んで内容をきちんと理解してから小論文の制作に入って欲しかった。また「具体的な例」として適切とは言えないもの、例えば一般的な外国語教育論を展開しているものなどは減点した。なお、文章表現に関して「言語を(に〇)習熟する」というテニヲハの誤りが極めて多く見られた。

以上